

制史研究の容易の業に非ざるは喋々を要せぬ所であつて従つて新研究の發表も少く志ある人の遺憾とする所であつたが、曩に三浦博士の名篇「法制史の研究」及び「續法制史の研究」出で今又此好著に接して欣快に堪へない。吾人は續卷の早く出づることを希望してやまぬ。(菊判七三八頁、岩波書店發行、價六〇〇)(後藤)

● 明治維新史講話 藤井甚太郎著

明治維新はあらゆる方面に於て我國を根本的に改造しただけに、それだけ範圍も廣汎で且つ頗る波瀾に富み、纏綿複雑極まりなきものであつた。而も其歴史は我國史中の最も意味深く最も光彩あるものであつて、日本民族純眞の精神は其中に發動してゐるのである。本書は著者が此の複雑にして而も光彩ある當時の歴史につき種々の新史料によつてよく其の真相を研覈し且つ深く諸事象の測源をも考察せるのみならず廣く大局にも著眼し全然新しき見方によつて之を講述せられたものであつて全局面の展開を明快に叙述し且つ其中に動いた精神をよ

く把握してゐるのは、さすがに維新史の權威たる著者の筆に領かれる。其の第一篇は社會組織を題して社會體系社會結合の二章に分ち、前者に於ては皇室皇族公卿大名武家百姓町人等の事を述べ、後者に於ては斯くの如き社會の大小中心及其の周圍が全體的又は部分的に如何なる風に連絡があつたかを觀察し、第二篇は幕末時代の諸思想を題して勤王思想、武家存立の思想、鎖國攘夷思想、開國論の大勢を述べ第三篇に於ては社會の缺陷を社會變革の兆を第四篇に於ては社會變革の動因を探索してそれは水戸藩の動搖及び南方琉球方面に於ける開國の氣運を米露兩國使節の來航にありし、第五編は諸勢力の分離を題して朝權の確立、公卿の政治的訓練、諸藩勢力の伸張浪人の運動を述べ、第六篇に於ては諸社會の參政を安政の大獄を述べ、第七篇は諸勢力分散の初期を題して之を幕政方針の一變、浪人運動の發展、薩長一藩の雄飛、諸藩主續々勅を奉じて東下す、攘夷全盛、幕權日々に衰ふの諸章に分ちて説述し、第八篇は政權分離を題して公武合體派の運動、征長役、兵庫先期開港問題諸

勢力に就て考察し、第九篇は統一運動の傾向を述べて之を倒幕運動、徳川慶喜の幕政改革、王政復古派諸勢力の連絡、討幕密勅降下と政權奉還、王政復古の五章に分ち第十篇及び第十一篇は明治社會の消極的成立及び其の積極的發達を説いて前者を徳川氏處分、東北諸藩の向背及處分、藩の處分、後者を官制改革及五ヶ條御誓文、議會制度の發達、新舊勢力の流れの諸章に分ち、第十二篇には明治初期の社會現象を宗教問題及學制、軍制及幣制、諸階級の變質、社會救濟問題等の方面より觀察し、第十三篇には嘉永六年六月より明治四年七月に至る年表が掲げてある。之を最初より通讀すれば幕末より明治に至る社會の動搖推移を根柢から知悉することが出來て、維新史の研究者のみならず一般國史に興味を有する人々にこつても極めて有益なる著述である。(菊版三〇八頁、東京雄山閣發行、價二・五〇)(松野)

●日本道德論 清原 貞雄著

先づ「總説」に於て日本道德學の必要を力説し、「本論」

に入りて國家を論じ、國體の意義、團體の研究、團體觀念の變遷を説明し、日本道德の要素を解剖し、轉じて「忠義」、「從順の徳と犠牲的精神」、「武士道の發達と其道徳的觀察」、「神道と國民道論」に就て詳細に論及したもので八章二十七節より成り、索引十八頁を添へた菊版五三八頁の大著である。從來數多く出た國民道徳に關する著書が殆んど哲學者又は法律學者の手に依りてなされたものであるが、國民道德學は國民の過去の生活——國民が古來有つて居つた所の道德思想、それと外來要素との關係、

國民の實行して來た所の道德——を充分に闡明して後に始めて樹立さるべきものであるから、寧ろ歴史家の手によりて研究批判されねばならず、又それでなければ、眞個の意味が解らない筈であり、従つて其の將來に關する處置を正當に處理する事が出來ないと言ふ著者の主張から、本書は公刊せられたものであつて、著者の言はたしかに一理はある。而して本書の勝れた所以亦其所に存するのであつて、吾人の祖先が實踐した跡を研究の對象とし、其長所と短所とを冷靜に識別し、以て人生々活に對